

文学教材本文の問題(2) —「少年の日の思い出」—

高木 徹*

About the Literary Texts of Japanese Class (2) : Jugendgedenken

TAKAGI Toru

要 約

ヘルマン・ヘッセ作、高橋健二訳の「少年の日の思い出」は、中学校1年の重要な国語科教材である。ところが、4社の教科書はすべて高橋健二訳であるにもかかわらず、本文には相当な異同がある。中でも、ドイツ語でほぼ同義の異なる単語を、高橋健二は「チョウチョ」「チョウ」と訳し分けているが、それを2社の教科書本文は「チョウ(ちょう)」の一語に統一しているのは問題ではないか。

また、翻訳作品の場合、言語や文化的背景の違いがあり、日本語作品以上に適切な注が求められる。蝶と蛾に関して、注の問題についても言及する。

キーワード：少年の日の思い出 ヘッセ 高橋健二 本文異同

1. はじめに

ヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出(Jugendgedenken)」は、ヘッセの代表作とは言えないが、高橋健二の訳文によって、しばしば中学校の国語教科書に採用されてきた¹⁾。現在では、国語教科書会社5社のうち、4社の中学校1年生の教科書に掲載されている重要な教材である。

ところが、教科書によって相当に本文異同がある。それには二つの理由が考えられる。一つは、高橋健二の訳文にいくつかの版があり、そのうちのどれを底本とするかによって、教科書本文も異なってくる。もう一つは、翻訳物であるがゆえに、日本語の作品と違って、教科書編集の際、本文に手を入れることへの抵抗感が少ないと想像されること、である。

ここでは、高橋健二の訳文と教科書本文との異同を検討することで、そこに潜む問題について考えてい

さらに、翻訳物の場合、言語や文化の違いが本文理解を妨げる可能性があり、日本語の作品以上に適切な注釈が求められる。教科書各社の注を比較することで、注の問題についても考えてみたい。

2. 先行研究

「少年の日の思い出」について、綾目広治は「翻訳小説であるからドイツ語の原作と比較検討するというアプローチの仕方も可能である。」²⁾と述べてつても、綾目自身は別のアプローチを採用している。が、本文異同を検討する場合、訳文である日本語を比較するだけでは、その議論に限界があり、重要と思われる異同については、ドイツ語原文をも参照しつつ、以下で検討していきたい。

* 中部大学現代教育学部児童教育学科

3. 本文異同

各社の教科書はいずれも高橋健二の訳を採用しているが、その底本が異なる。教科書の底本となっているのは、次の3種である。

- A 高橋健二訳『ヘッセ全集第二巻 車輪の下』(新潮社、1957年)
- B 『新潮世界文学 37 ヘッセⅡ』(新潮社、1968年)
- C 高橋健二訳『ヘッセ全集 2 車輪の下』(新潮社、1982年)

このうち光村図書はAを、学校図書はBを、教育出版と東京書籍はCを、それぞれ底本として使用している。主な異同をまとめたのが、次頁の表である。

4. 本文の問題

第3段落の最後に「窓いっぱい不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。」という文があり、そこが光村図書と東京書籍の教科書では次のようになっている。

窓全体が不透明な青い夜の色に閉ざされてしまった。(光村図書)
 窓はすっかり不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。(東京書籍)

「窓いっぱい」の部分は、確かに日本語としてやや生硬な表現ではあるが、手直しをする必要があるだろうか。また「夜色」という語を正しく読むのは、中学1年生にとっては難しいが、おおよその意味は漢字から想像できる。「青い夜の色」とまで噛み砕いて読ませるのは、お節介ではないか。それとも、ドイツ語原文では「Nachtblau」とあるので、「青い夜の色」と訳した方が正確である、という判断が働いたのか。

さて、一番の問題は、「チョウチョ」と「チョウ」である。第4段落を例に挙げよう。ドイツ語の原文で第4段落は次のようになっている。

Meine Schmetterlinge aber leuchteten im hellen Lampenlicht prächtig aus dem Kasten. Wir beugten uns über sie, betrachteten die

schönen Gebilde, die tiefen köstlichen Farben, nannten die Namen der Falter⁷⁾.

『ヘッセ全集』(1982年版)で、第4段落は次のように訳されている。

私のチョウチョは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光りかがやいた。私たちはその上にからだをかがめて、美しい形や濃いみごとな色をながめ、チョウの名まえを言った。

下線を付した「Schmetterlinge」「Falter」の2語は、語感異なるもののいずれも「蝶/蛾」を表す語であり、同じ語の繰り返しを避けるため言い換えたものと思われる。それを高橋健二は「チョウチョ」「チョウ」と訳し分けたのである。

ところが、光村図書の教科書本文は「ちょう」で、東京書籍の教科書本文は「チョウ」で統一している。たぶん「チョウチョ」という語が幼稚な印象を与えるからであろうと想像するが、安易に統一してしまうことには問題がある。「チョウチョ」「チョウ」と高橋健二が訳し分けたことによって、原文では異なる語が用いられていたことの痕跡が残るのである。

もう一つの大きな問題は、会話文を示す鍵括弧の有無である。

教科書本文は各社とも、大人である現在から、過去の少年時代に遡り、そのまま物語は終わっている。そのことに何だか中途半端な印象を受けないだろうか。

第12段落で、客は「ぼくは、八つか九つのとき、チョウチョ集めを始めた。」と語り始め、その語りは最後の段落まで続き、「そしてチョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなにおしつぶしてしまった」と語り終える。

高橋健二の訳文はどの版も、この客の語り全体が鍵括弧「」で括られているのである。ところが教科書本文はすべて、この鍵括弧を取り除いてしまっている⁸⁾。教科書では、8~12ページ分に相当し、鍵括弧の及ぶ範囲があまりに長くなるからであろうか。

文学教材本文の問題(2)

形式 段落	A 全集 1957	B 新潮 世界文学	C 全集 1982	光村 ³⁾	学図 ⁴⁾	教出 ⁵⁾	東書 ⁶⁾
2	チョウチョ集め	チョウチョ集め	チョウチョ集め	ちょう集め	ちょうちょ集め	チョウチョ集め	チョウ集め
3	窓いっぱい	窓いっぱい	窓いっぱい	窓全体が	窓いっぱい	窓いっぱい	窓はすっかり
3	青い夜色	青い夜色	青い夜色	青い夜の色	青い夜色	青い夜色	青い夜色
4	私のチョウ チョ	私のチョウ チョ	私のチョウ チョ	私のちょう	私のちょう ちょ	私のチョウ チョ	私のチョウ
4	チョウの名ま え	チョウの名ま え	チョウの名ま え	ちょうの名前	ちょうの名前	チョウの名前	チョウの名前
5	黄ベニシタバ 蛾で、ラテン 名はフルミネ ア	ワモンキシタ バ（輪紋黄下 翅）という蛾 で、ラテン名 はフルミネア	ワモンキシタ バ（輪紋黄下 翅）という蛾 で、ラテン名 はフルミネア	ワモンキシタ バで、ラテン 名はフルミネ ア	わもんきした ばという蛾 で、ラテン名 はフルミネア	ワモンキシタ バで、ラテン 名はフルミネ ア	ワモンキシタ バで、ラテン 名はフルミネ ア
6	チョウ	チョウ	チョウ	ちょう	ちょう	チョウ	チョウ
7	チョウチョ	チョウチョ	チョウチョ	ちょう	ちょうちょ	チョウチョ	チョウ
8	チョウチョ	チョウチョ	チョウチョ	ちょう	ちょうちょ	チョウチョ	チョウ
以下、「チョウ」「チョウチョ」に関する異同は省略							
12	「ぼくは、	「ぼくは、	「ぼくは、	僕は、	僕は、	ぼくは、	僕は、
13	黄アゲハチョ ウ	キアゲハ	キアゲハ	キアゲハ	きあげは	キアゲハ	キアゲハ
14	コムラサキ	コムラサキ	コムラサキ	コムラサキ	こむらさき	コムラサキ	コムラサキ
15	コムラサキ チョウ	コムラサキ	コムラサキ	コムラサキ	こむらさき	コムラサキ	コムラサキ
16	楓蚕蛾	ヤママユガ	ヤママユガ	クジャクヤマ マユ	やままゆが	ヤママユガ	クジャクヤマ マユ
16	百万マーク	百万マーク	百万マーク	百万マルク	百万マーク	百万マルク	百万マルク
16	リヴィウス	リヴィウス	リヴィウス	リビウス	リビウス	リヴィウス	リヴィウス
16	『トビ色…… しまう。』	『トビ色…… しまう』	『トビ色…… しまう』	「とび色…… しまう。」	「とび色…… しまう。」	「とび色…… しまう。」	「とび色…… しまう。」
17	入り口はあ い て い る こ と が あ っ た	入口はあ い て い る こ と が あ っ た	入口はあ い て い る こ と が あ っ た	入り口は開 い て い る こ と が わ か っ た	入り口は開 い て い る こ と が 分 か っ た	入り口は開 い て い る こ と が わ か っ た	入り口は開 い て い る こ と が 分 か っ た
18	真近	間近	間近	間近	間近	間近	間近
24	『おまえは…… なりません』	『お前は…… なりません』	『お前は…… なりません』	「おまえは…… なりません。」	「お前は…… なりません。」	「おまえは…… なりません。」	「おまえは…… なりません。」
24	『そして…… なりません。』	『そして…… なりません』	『そして…… なりません』	「そして…… なりません。」	「そして…… なりません。」	「そして…… なりません。」	「そして…… なりません。」
25	『きょう……行 きなさい！』	『きょう……行 きなさい！』	『きょう……行 きなさい！』	「今日……行 きなさい。」	「今日……行 きなさい！』	「今日……行 きなさい！』	「今日……行 きなさい！』
25	エーミール は、とたずね た。	エーミール は、とたずね た。	エーミール は、とたずね た。	「エーミール は？」／と尋 ねた。	「エーミール は？」／と尋 ねた。	エーミール は、と尋ねた。	エーミール は、と尋ねた。
26	低くちえつと 舌を鳴らし	低く、ちえつ と舌を鳴らし	低く、ちえつ と舌を鳴らし	低く「ちえつ。」 と舌を鳴らし	低くちえつと 舌を鳴らし	低く、ちえつ と舌を鳴らし	低く、ちえつ と舌を鳴らし
26	『そうか、…… なんだな。』	『そうか、…… なんだな』	『そうか、…… なんだな』	「そうか、…… なんだな。」	「そうか、…… なんだな。」	「そうか、…… なんだな。」	「そうか、…… なんだな。」
27	『結構……で きたさ。』	『結構……で きたさ』	『結構……で きたさ』	「結構……で きたさ。」	「結構……で きたさ。」	「けっこう…… できたさ。」	「けっこう…… できたさ。」
29	ぼくは、床に おはいり、と 言われた	ぼくは、床に おはいり、と 言われた	ぼくは、床に おはいり、と 言われた	僕は、「床に お入り。」と 言われた	僕は、「床に お入り。」と 言われた	ぼくは、床に お入り、と言 われた	僕は、床にお 入り、と言わ れた
29	おしつぶして しまった。』	おしつぶして しまった』	おしつぶして しまった』	押しつぶして しまった。	押し潰してし まった。	押し潰してし まった。	押し潰してし まった。

ちなみにドイツ語原文は次のようになっており、高橋健二の訳文は、ドイツ語の引用符を鍵括弧に置き換えたものになっている。

„Das Schmetterlingssammeln fing ich mit acht oder neun Jahren an und trieb es anfangs ohne besonderen Eifer, einen nach dem andern und drückte sie mit den Fingern zu Staub und Fetzen.“⁷⁾

この鍵括弧の問題は、一見些細なことのように見えるが、実は重大な問題を孕んでいる。鍵括弧の省略された教科書本文を読むと、最後の場面で読者は、自分の過ちから、せっかく大事にしてきた標本を「こなごなにおしつぶしてしまった」少年（ぼく）の姿に立ち会い、「ぼく」の心情に思いを馳せる。が、現在の大人になった「ぼく」の心情に立ち戻ることはしない。少年時代の過去に遡り、そのまま読者は宙づりにされるのである。

しかし、本来の原文では、「客」の語りが終わったことが明示されることで、物語を読み終えた読者は、今は大人である客が「私」に過去を語っていた窓際に立ち戻るのである。そして、少年時代の「ぼく」の思いだけでなく、大人となった「客（昔のぼく）」の悔恨をもそこに重ねて思いを馳せる。さらには、その話を聞いた「私」の気持ちも想像するかもしれない。

客の語りの終わったことが明示されることで、読者は、少年時代の「ぼく」、成長し大人となった「客」、話を聞いた「私」、という三者の思いを重ね合わせて味わうことになる。過去と現在とを重ね合わせた重層的な読後感をもたらすところが、この物語の奥の深さであると思われるが、教科書のように鍵括弧を除去してしまうと、現在を導入部として過去に遡る、という単純な味わい話になってしまうのである。これが鍵括弧を取り除くことの問題点である。

なお、この物語で最も重要な「蝶／蛾」として「ヤマユガ」が登場するが、高橋健二は、最初「楓蚕蛾」の訳語をあて、その後、「ヤマユガ」と改めている。ところがこれを、光村図書と東京書籍の教科書は「クジャクヤマユ」としている。これは、昆虫に詳しい岡田朝雄が「Nachtpfauenauge」を「ク

ジャクヤマユ」と訳した⁹⁾ ことに拠るのかもしれない。

5. 注の問題

この物語に登場する「蝶／蛾」は、「ワモンキシタバ」「キアゲハ」「コムラサキ」「ヤマユガ（クジャクヤマユ）」の四種であり、光村図書と教育出版の教科書はすべての挿絵を掲載している。挿絵を見れば、二つは蝶であり、二つは蛾であることが明らかである。学校図書と東京書籍の場合、挿絵はないが、脚注から同じことがわかる。とりわけ、この物語のクライマックスをなす「ヤマユガ（クジャクヤマユ）」は蛾である。

冒頭で「蝶集め」の話と思って読み始めると、最初に出てくるのは「ワモンキシタバ」という名の「蛾」である。一般の中学生なら、変な話だと思うだろう。

言語や文化的背景の異なる外国作品の場合、適切な注がないと、妙な誤解を招くおそれがある。それでは、各社の教科書で「ワモンキシタバ」にどのような注がつけられているか、次に紹介する。

蛾の名。ドイツ語では蛾とちょうの区別はない。（学校図書）

ヤガ科の蛾の一種。蛾と蝶には生物学的な意味での区別はなく、ドイツ語では、一つの言葉で両者を表すことができる。（教育出版）

ガの一種。生物学ではガとチョウの区別はない。ドイツ語でも区別していない。（東京書籍）

「ドイツ語では、一つの言葉で両者を表す」という教育出版の注がわかりやすいと思うが、どの注であっても、「蝶集め」の話に「蛾」が出てくる奇妙な話のわけが納得できるだろう。ところが、光村図書の注はこうなっている。

開張（左右の前羽の先端から先端までの長さ）、約五十五ミリメートル。前羽は灰色がかった薄茶色、後ろ羽は濃い黄色で黒い帯がある。（光村図書）

これでは「蛾」の登場するわけがわからない。そ

のわけは教師が説明すればよい、という考え方かもしれないが、ドイツ語では「蝶」と「蛾」を区別しない、というのは一般的な知識とはいえない、すべての国語科教師が教師用指導書を熟読しているとは限らない。授業で取り上げる前に予習で読んだ生徒が、戸惑いを覚えないで済む程度の注は必要ではないか。

6. おわりに

翻訳作品の場合、我々が目にしているものがオリジナルではなく訳文であるがゆえに、教科書編集に際して、日本語に手を入れることに対する抵抗感が少ないのではないか。

翻訳作品であるにもかかわらず、教科書編集者が日本語の訳文だけを見て、その日本語を書き直しているように思われる。ドイツ語原文で異なる語が使われているので、高橋健二は「チョウチョ」と「チョウ」に訳し分けたと想像されるのだが、そのことを承知で一語に統一したのだろうか。

文学とは、言うまでもなく、言葉を素材として紡ぎ出される芸術である。「チョウチョ」と「チョウ」は意味が同じだから一つに統一しても構わない、という安直な発想では困る。それでは、原文の異なる二語を、それぞれ別の日本語に置き換えた翻訳者の苦勞も水の泡と化してしまう。訳文に大きな問題が

あるのであれば、新たな翻訳者に新訳を依頼し、それを教科書に採用すればよいのであり、既に故人となった翻訳者の文章に安易に手を入れることは慎むべきではないだろうか。

注

- 1) 田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編 1年』(教育出版、2001年)によれば、国語教科書への初掲載は、中教出版の中学校2年生向け国語教科書(1952年)である。
- 2) 綾目広治「幼いチョウ採集家の〈逸脱〉」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編 1年』(教育出版、2001年)所収)
- 3) 『国語 1』(光村図書出版、2012年)
- 4) 『中学校国語 1』(学校図書、2012年)
- 5) 『伝え合う言葉 中学国語 1』(教育出版、2012年)
- 6) 『新しい国語 1』(東京書籍、2012年)
- 7) 高橋健二編『Jugendgedenken』(郁文堂、1957年)
- 8) 高橋健二の訳文では、語り全体に鍵括弧「」がつけられているため、その中の会話文は二重鍵括弧『』で示されている。一方、教科書各社の本文は、語り全体の鍵括弧を取り除いたため、会話文は鍵括弧で示されている。また、教科書本文では、導入部分と客の語りとを分けるために、その間で1行空けている。
- 9) 岡田朝雄訳『ヘルマン・ヘッセ 蝶』(岩波書店、1992年)の「解説」に「クジャクヤママユ」に関する詳しい説明がある。

受付日 2013年9月30日

受理日 2013年10月28日